



訳 ハリー・レヴィン：ディケンズ文学にみる叔父
(1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井口, 邦男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00008031

訳 ハリー・レヴィン：ディケンズ文学にみる叔父 (I)

A Japanese Translation of Harry Levin's “Uncles of Dickens”

井口邦男*

Kunio IGUCHI *

(昭和57年4月15日受理)

訳者まえがき

20世紀中頃以降盛んになったディケンズ研究は、この作家の作品群に現われる種々の反復的パターン（再帰的なイメージ、状況、態度から成る）について論じてきた。本論文の筆者、ハーヴァード大学教授ハリー・レヴィンは、作品に繰り返し登場する「叔父」に着目し、その反復のパターンを考察することにより、ディケンズの小説世界を解明する一つの手がかりを提供している。本論文は4つのセクションから成り立っているが、「ピクウィック」を論じた第2セクションは紙数の都合で割愛した。

『ディケンズの少年たち』——それが今も筆者の記憶に残る、全く独りで読んだ初めての本の題名であり主題である。今となつては、文献目録をさかのぼって調べ、小説の中の挿話を子供向物語に仕立てたラムもどきの改作者が誰なのか、確かめてみたいという衝動を感じることはない。その改作物を通して、幼年期が幼年期に直接語りかけてきたために、ディケンズの描く幼い頃の思い出が、他の無数の読者の場合と同様、筆者個人の幼い頃の思い出と分ち難く混ざり合っている。その後原作そのものを読み、再読三読するようになった時、もっと大きな、絶えず広がり続ける文脈が開けた。だが、間主観的な意識の中心には、相変わらずオリヴァー、スマイク、ポール、デイヴィッド、ジョーおよびピップがいた。なぜなら、ディケンズが彼の世界を心に描いたのは、この少年たちの目を通してであったからだ。『ディケンズの少女たち』と題する姉妹篇が存在したかどうか、また男女読者が結局は、リトル・ネル、リトル・エムリー、リトル・ドリットに対しても少年たちに対してと同じ程深く感情移入できたかどうか、筆者は知らない。しかし家なき児の性別が問題なのではなく、父親か母親、または両親から引き離されてしまっているということが問題なのだ。ディケンズの描く主役の半数は孤児で、残りの大多数は、片親のない子である。ディケンズの場合、この孤立が心理的作用であったことは、勿論伝記によって周知のことである。12才の時、父親が借金のため監獄に入れられ、ディケンズ自身も短期間ながら児童労働の憂き目にあい、一時的に彼の家庭は崩壊した。彼の想像力が何度も繰り返しこの出来事へと立ち返ってはまた離脱した、ということも周知のことである。ハリー・ストーンが明言したように、「自分自身の両親から拒まれ見捨てられたという意識が、

*一般教養科 (Department of General Education)

彼の生涯においてたぶん最も決め手となる感情だったであろう。」

その結果として生じたディケンズの傷ついた父親像は、ウィルキンズ・ミコーバーにおいてユーモラスに、ウィリアム・ドリットにおいて辛辣に描かれている。父親像の損傷がもっと根深いものであることを裏付ける証拠は、登場人物のきわめて多数につきまとうあの父親不在の状態である。『大いなる遺産』のウェミック老人のように祝福の言葉を与える「年老いた親」1人に対し、『バーナビー・ラッジ』のジョン・チェスター卿やジョン・ウィレットのように息子と絶縁する父親が、少くとも2人の割合できつと存在する。また表面上の孤児の場合、ずっと以前に他界したはずの父親が生きていたとしても、バーナビーの父親の如く、暗い陰のある歓迎されざる人物であるかもしれない。スマイクがラルフ・ニクルビーの夭死した息子であったと判明する皮肉な巡り合せも、実に冷酷である。ディケンズ特有の、一家の稼ぎ手の役割をめぐる主客転倒は、『リトル・ドリット』の中だけに限らず、多方面にわたっている。ネルは祖父を油断なく見守らねばならず、アグネスはウィックフィールド氏の小さな慈母とならねばならず、シシー・ジューブは曲芸団の道化の父親に捨てられ自活せねばならない。この状況が最も明白なのは『互いの友』においてである。なぜなら、大酒飲みの「ドールズ氏」を人形服洋裁師ジェニー・レンが絶えずたしなめるから。——つまり、彼女が「彼の小さな親」となり、彼を「年老いた放蕩息子」扱いするからだ。『荒涼館』のハロルド・スキンポールは、「ほんの子供」になりすますことにより欲望をほしいままにする。『困難な時代』のジョサイア・パウダビーは、歴とした母親がいるにもかかわらず、むしろ捨子のように見せかけたがる。トマス・グラッドグラインドは息子と娘の素行によって、自分の教育理論の正しさを覆されている。献身的愛情を注ぐ家長としてのドンビー氏は、法則の正しさを示す例外的存在である。というのは、病弱なポールに対する氏の献身的愛情は、耐え忍ぶフローレンスに対する冷淡な仕打ちによって、完全に相殺されるからだ。

トルストイが言ったように、幸福な家庭は大へん似通っているかもしれないが、不幸な家庭は、不幸の現われ方がそれぞれ異なっている。トルストイ自身の家庭内での屈辱とディケンズのそれとは、両作家とも家父長にふさわしい大家族を養ったとはいえ、大きく異なっていた。幼年期に家庭崩壊を経験したディケンズは、後には彼自身もまた家庭を破壊し、秘かに世間の中傷がかけめぐり中、妻と別居したのだった。家庭と炉辺、家族につきもののあらゆる美点を賞揚する彼が、驚くべきことに、しばしば幸福の域に達することのない1連の結婚——ドンビー夫妻の深刻な対立からデイヴィッドとドーラの苦甘い結婚に至るまで——を描いたのだ。妻の尻に敷かれる夫、虐待を受ける妻、滑稽な義理の母親などの系列が描かれたのは言うまでもない。姦通は相対的に少なく希であるけれど、その疑念がしばしば生まれている——『デイヴィッド・コバフィールド』のストロング夫妻、『炉ばたのこおろぎ』のピアリベングル夫妻において。この2組の夫妻は年令の開きによって世間を驚かせたが、『リトル・ドリット』のガウワン夫妻、『互いの友』のレイバーン夫妻のように、社会的に「不釣合な結婚」のもたらす結果に直面しなければならぬ夫妻もいる。婚約破棄されたミス・ハヴィシヤムの妖怪の如き姿は、結婚に恨みを抱く敵として大きく浮かび出る。彼女の被後見人エステラの最初の結婚はそんな恨みを無視して行われるが、結局その恨みには十分な理由があることを彼女に証明してみせる。そして『大いなる遺産』は、月並みな結婚約束もなくあいまいな結末となっている。めったに再版されたことのない3文文士の仕事『若夫婦スケッチ集』は、1840年——ディケンズの結婚後4年も経たない年——に匿名で出版され、ヴィクトリア女王の婚約に敬意を表したものである。これは独身の男に与える警告として書かれ、ディケンズ的感傷よりもサッカーの冷笑に近い見方で、12組のひどい実例を挙げている。

それでも、ディケンズは小説家の中でとび抜けて家庭重視型人間だとわれわれは考え続けるし、良かれ悪しかれ彼の描いた「家庭」の数と種類の多さを見れば、この考え方にも十分な根拠がある。理想からほど遠い現実を示さざるを得ないと考えていたため、彼にとっては理想もまた、劣らず興味を引くものであったのだ。だから彼のハッピー・エンドにおいては、果てしなく結婚話がまとまる見込みが生じている。彼自身の親族との関係、さらに妻との関係が、彼の仕事に、終始、密接で複雑な関わりを持っていた。ジョン・ディケンズ〔父〕は無責任な世帯主であったかもしれないが、エリザベス・ディケンズ〔母〕には兄ジョン・ヘンリー・バローがいて、彼が若いディケンズをジャーナリズムへと踏み込ませた。また、ディケンズが靴墨工場に遣られたのは、母の妹の継子ジェイムズ・ラマートを通してであった。父親や弟だけでなく姻戚達もが、やがては「チャールズ叔父さん」の財政的成功に依存することが運命づけられていた。ディケンズは、身内たちへのこの人間的執着と、努力して目指さねばならなかったあの芸術的客観化との間を、絶えず揺れ動く状態で生きていたに違いない。ジョイス——親類縁者に対してディケンズと同様な見解を抱きつつ生長した——は、スティーヴン・ディーダラスを、自ら公言した継子だと考えた。「彼は、彼等とは血肉のつながりがほとんどなく、里子や乳兄弟という奇妙な親族関係にあるのだと感じた。」〔の前後で繋ぎ〕サミュエル・バトラーはヴィクトリア時代の家に対する反動として、思考活動の中では父親殺しであった。ドストエフスキーは、文字通り父親が殺されるのを見たのだが、精神的な父親追求者であった。カフカは、父親の権威からの脱出と、容認される自己同一性の探求において、20世紀のジレンマを身を以て示そうとした。

ディケンズは父親代理人を必要としなかった。ミコーバー＝ドリット〔型の父親〕が、彼の実生活において、すでに十二分な存在であったからだ。彼は気質上、バトラーと同じ意味での文学における親殺しはできなかったが、当局に対し因習打破主義者の姿勢をとり、次第に同情の輪を広げようと努めた。いかなる家屋——地方の大邸宅、都市の商会、法廷、官庁、工場、鉱山、硬直した支配機構と化した他の全てのもの——であろうとその中に現われる家長に対して、ディケンズはわずかな敬意しか抱いていなかった。学校は例外的な事例であった。なぜなら、学校は幼い者たちと重大な関係があり、教師は親代りであったからだ。だが、ディケンズの長い系列の教師の中には、味方と同数の敵も存在し、またディケンズの描く教室は、公共施設が持つ厳格さの点で彼の描く牢獄と相似しがちである。それでは、子供——あるいは子供の体験を通して光景を注視するわれわれ——は、いったい誰を尊敬することができるのだろうか？ 子供を指導する、あるいは社会学者流に表現すれば、子供の役割模範（ロール・モデル）となる大人はどこにいるのか？ ディケンズにとっては、社会は他の点ではいざ知らず、1つの点でプラトンの共和国に似たものである。つまり、社会は1団の保護者たちによって統轄されているのだ。これらの保護者が血族である場合、それは叔父であり時には叔母である。そうでない場合、にせの叔父なのであるが、彼等は当事者の若い登場人物に対して、「里子という奇妙な親族関係」にあるかもしれない。彼等〔ディケンズの保護者たち〕の立場は、人類学者によって世界各地の部族の中に観察された今なお残る1つの慣習——母方オジがオイの両親よりもしばしば責任の重い役目を果たす——と、偶然一致している。時には同じ役目だが、名付親や代父（コンペール）により果たされることもあるが、その人達は、託された年少者を祝福、祝讃する力を持ち続けるのだ。

このゆえに、クロード・レヴィ＝ストロースの言わゆる「オジの特権（ル・プリヴィレージュ・アヴォンキュレル）」が、普遍性を有する1つの行動様式を明示するのであり、ディケンズの幾つかの重大なテーマの底にも横たわるのである。そのような関係を通してどうい

とが明らかになるか、今1度彼の作品を拾い読みする価値はあろう。彼が放棄した機械じかけの失敗記録そのものである『ハンフリー親方の時計』の中に、1つの範例が暗示されている。この作品は、1連の物語のための枠組を構成する予定であったのに、ピクウィック氏の寄稿でさえも、活気を添えることができなかった。それが消滅せずに残った唯一の理由は、長篇の物語『骨董屋』の発展にはずみをつけたからなのだ。この小説は、1人称の語り手ハンフリー親方によって始められるが、親方は第3章が終ると退場することになる。その間に、この老人は夜中のロンドンの街路を散歩中、迷子のリトル・ネルに出会い、彼女をその祖父の古物店まで送り届けている。悲しいことに、その憩いの場も決して安定の得られる場所でなく、ネルは前途に横たわる更に長い放浪から救われることはないだろう。その放浪は、ディケンズの主役たちにつきものの苦境と並び、ハンフリー親方の言葉の中にも予示されている。——「子供たちがまだ幼児の時期もぬけてないのに、世の荒波の中にはいって行く姿をみると、いつも悲しいことに思っているんです。」もし子供たちが道に迷えば——ディケンズはわざわざほのめかせたのだが——、彼等が幸運にも出会うのは、サマリア人〔サマリア人〕であり、決してヘロデ大王〔ヘロデ大王〕ではないのだ。もう1つ周辺の注釈が、『ボズのスケッチ集』の中の、おはこの話題「クリスマス・ディナー」に関するスケッチにおいて、行間にはほのめかされている。上機嫌とくつろぎの雰囲気包まれたこの例年の家族の集いで、主人役を勤めるのは——祖父や祖母が生きていて出席しているにもかかわらず——ジョージ叔父だということに、われわれは気付くのだ。

この置き換えは、「世の荒波の中にはいって行く」あの多くの子供たちの父親不在と同様、隠れた点を浮かびあがらせている。子供は必ず他の年長者に遭遇するに決まっているが、その人は力を貸してくれるか、前進を阻むかのいずれかであろう。叔父は、自身が父親でない場合や未婚で裕福な場合、当然、特に頼りにできる人である。それゆえ、『ニコラス・ニクルビー』のケンウィック家の子供たちが、「公職にある人」——つまり水道料集金人、リリヴィック氏をお世辞で祭り上げるのだ。氏が突然、女優ヘンリエッタ・ペトーカーと結婚するや、彼等は大いに憤慨する。そしてヘンリエッタが休職給取りの海軍将校と駆落ちしてしまい、リリヴィック氏の遺言書の中で彼等の元通りの地位が回復されてはじめて、彼等の怒りは解けるのである。さらに、ボズによるスケッチ「ブルームズベリーの洗礼」の主役、金持ダンプス氏は、終生変らぬ子供嫌いなのに、説得されて甥の息子の名付け親となる。氏はしぶしぶ贈ることにした祝い物の銀製コップを、運命のいたずらで途中盗まれてしまい、氏の行うお祝いのテーブルスピーチは乱調のすえ、子孫に対する厭世的非難になってしまう。『再録小品集』の「貧しい親類の話」では、この価値観の衝突におけるめめしい反面が描かれている。「チル叔父さんから遺産をもらえる見込みがファイになってしまった」と貧しい親類は告白する。「期待されていたにちがいない程、私が世事にたけてなかったからだ。」彼の持っている財産はほとんどなく、当てにできる財産はさらに少ない。したがって彼は許婚者からはねつけられる。そして、彼の孤独な生活のなぐさめとなるのは、いとこの息子リトル・フランクに対する、叔父——これがまだ妥当な語であるとして——のような盲愛だけである。妻や子についての彼の自慢話は、すべて単なる「空中楼阁」であり、ラムの「幻の子供たち」のような衰れをそそる夢にすぎなかった。

上の最後の実例では、叔父気質の2つの面——精神的感化力、および動機づけのもと——が示されている。「叔父」は社会的に立派に安定しているが故に、年若い縁故者たちから、生活の面倒を見てくれる気前のよい保護者、すなわち後見者的精神の持ち主であると、期待をかけられるのは当然のように思われる。そのような期待を裏切ったならば、叔父は不人情な敵意と

悪意の持ち主に見えるだろう。つまり、抑えてやるべき反対勢力への加担者に見えるだろう。甥は現実から拒まれたものを空想の中で追求する時、叔父気質について逆のもっと肯定的見方を指向し、叔父の役目は詩的正義の代理人であることを暗に示すのだ。「私の叔父（マイ・アングル）」が質屋を意味するありふれた俗語だったのは、理由なきことではない。——ディケンズが編集補佐役W・H・ウィルスと共作した同名の題の笑劇では、その意味で用いられている。さらにまた、それはチャズルウィット家の借金狂いの或る先祖〔*Charles Widdowson*〕に関する滑稽な1節の手がかりである。

蛾の猛威をまぬがれた彼の手紙の断片をとおして、彼がたえずおじさんのことを口にし、皿、宝石、本、時計、その他の貴重品を贈り物にしてこの男のご機嫌をとり結ぼうとしていたところからみれば、この男に遺産相続の期待をいかに大きくかけていたかがわかってくる。こうして、あるとき、彼は兄弟のもっていた肉汁用のスプーンについてその兄弟に手紙を書いているが、これは彼（ディッゴリー）が借用したか、所有していたものらしい。「あの抵抗しようもない魅力的なおじさんには、自分のもちもんぜんぶをやってしまったよ」……この紳士の庇護と勢力はすごく大きくひろがったものだったにちがいない。それというのも、この紳士の甥は「彼の好み（^{イギリス} *his taste*）は余りにも高すぎる」——「それはきつすぎる」——「とてつもないもんだ」——等々と書いているからである。（『マーティン・チャズルウィット』 第1章）〔北川悌二 訳〕

ここでは、2重の意味を持つ語句の使い方がしつこいため、着想の2重性——困った時の友に見せかけている強欲高利貸し——が強められている。この2つの可能性を、エドモンド・ウィルソンは独創的論文「2人のスクルージ」の中で考慮に入れていた。『クリスマス・キャロル』のエビニーザ・スクルージは、にこやかな甥のフレッドと交わすクリスマス休暇についての意地悪い議論を通して、叔父であることがはっきり示される。スクルージは、彼の書記ボブ・クラチットとの関係においては、心優しい使用人によって忠実に仕えられる無慈悲な雇い主の列——ニューマン・ノググスに仕えられるラルフ・ニクルビー、チャフィ老人に仕えられるチャズルウィット1家など——に加わっている。スクルージが救済され、「ティム坊やの第2の父」へと生まれ変わるのには、心理的動機づけというよりもむしろ道徳的考案によっている。ディケンズの性格描写は、ウィルソンも認めたように、整然とした均一性がある。「初期ディケンズの気むつかし屋は……古風な金貸し・守銭奴であり、英国演劇界のメロドラマにおいて、既に何十年間も役立っていたにちがいない……彼等はクリスマスの無言劇中の悪い叔父さんで、陽気な道化役や優しい妖精を引き立たせ、また誰もが始めから承知していることだが、必ず正体をあばかれ、顔色を失くす運命にある。」

これは、やや印象主義的ではあるものの、きわめて示唆に富む指摘である。というのも、ディケンズの登場人物を演劇との関連で眺めると、隠れた点が浮かびあがるからなのだ。クリスマスの無言劇や、乱闘場面の多いメロドラマを越えたかなたには、シェイクスピアの宝庫がそびえ、そこには——デンマーク王クローディアスをさえ凌ぐ——邪悪な叔父の真の原型、リチャード3世の威嚇的姿があった。王権に対するディケンズの軽蔑を反映している『子供の英国史』は、叔父ジョン王の命令で殺害された「父なし子」アーサー王子のような王家の孤児たちを、くどくど扱っている。必然的に、この年代記の挿話の中で、リチャードの主要な犠牲者、ロンドン塔に幽閉された2人の幼い王子の暗殺を物語る型にはまった箇所ほど、年代記編者ディケンズの同情を引く挿話はない。そしてまた、シェイクスピアの戯曲の中で、『リチャード

3世』ほどディケンズが何度もくり返し言及した戯曲は他にない。ロチェスター（『再録小品集』の「ダルボロー」）のロイヤル劇場で彼が6才の時に観た『リチャード3世』の上演が、当然、彼の最も幼い頃の芝居の思い出であった。最も奇妙な観劇の思い出の1つ——彼の偏った愛着を試練に合わせたにちがいない——は、1848年にブライトン〔イギリスの海浜地帯〕でその戯曲の題名役を演じた太った中年女性についての思い出だった。「私設劇場」についてのボズのスケッチにおいては、芝居狂のアマチュア役者が金を払って演じることのできる役柄1覧表のうちで、最も興味をそそり、最も値の張る役柄として、リチャード3世の名が真先に挙げられている。そんなアマチュア役者の1人ウォプスル氏が食前の祈りをあげる姿は、せむしの王位篡奪者をピップに思い起こさせる。ウォプスル氏の舞台技巧の1つ「摺り足の所作」は、ディケンズ自身の戯曲（マーク・レモンとの共作共演）『ナイチンゲール氏の日記』の中で呼び起こされている。悪行を楽しむ悪役は皆、リチャードにならびっこをひいて歩かねばならない——中で最も目立つのは『骨董屋』のクイルプで、彼の妻の言葉によれば、彼の性格は「第2のリチャードせむし王」である。

しかし、もう1人のスクルージ、すなわち1夜にして改心し博愛家に変身する、存在し得ぬわけではないが公算の少ない分身についてはどうなのか？——もっと1般的で尤もらしい言い方をすれば、ディケンズの良い叔父についてはどうなのだろうか？良い叔父にも独自の原型があり、悪い叔父に劣らず特異な傾向を持つが、それほど芝居がかっていないのは、演劇よりも主に小説から派生しているためである。良い叔父の中でも著名なのはトービー叔父〔『ピクウィック』の人物〕で、この叔父の愛すべき欠点の方が、トリストラム・シャンディにとっては、父親の空論的奇想よりも性に合っていた。良い叔父の系譜は容易にたどることができ、アダムズ牧師〔『ピクウィック』の小説「クエーカー」の人物〕とプリムローズ牧師〔『リチャード3世』の小説「リチャード」中の人物〕、ヒューディプラス〔『ピクウィック』の小説「クエーカー」中の人物〕とシンタクス博士〔『ピクウィック』の小説「クエーカー」中の人物〕を経て、騎士のロマンスの中に自分の手本を見つけたあの偉大な典型へとさかのぼることができる。ドン・キホーテ自身と同様、彼等も高邁・夢想的な闘士であり、邪気はないのに事件を起こしがちな道連れである。件のお人好し1行の中でピクウィック氏が中心的位置を占めることは、ワシントン・アーヴィング以来批評家たちの指摘するところである。アーヴィングはディケンズ宛手紙の中で、「なつかしのピクウィックは、平凡な生活のドン・キホーテであり、読者はドンの場合と同様、初めのうち彼のことを笑うけれど終いには愛するようになる」と記した。ドストエフスキーの解釈では、笑いではなく愛情が優位を占めるので、ピクウィックとキホーテは、イエス・キリストと同じグループに入れることができよう——彼等は「絶対的に善良なる者」、つまりすげなく拒絶される利他主義者の化身であり、彼等に対応するドストエフスキーの登場人物は、『白痴』のマイシユキン侯爵であろう。ドストエフスキーは、自分のディケンズ解釈がこじつけで主観的なものだと十分気付いていたようだ。『ピクウィック・ペイパーズ』がたちまちにして成功を収め、著者の小説群の中でも特異な地位を占めたのは、持続的陽気さのお陰であったのだ。この作品が世に出ることで、ディケンズは小説家としてのデビューを飾り名声を博したが、それはヴィクトリア女王の即位という文化の分岐点と時を同じくする1837年のことだった。

(中 略)

ディケンズの小説で、ピクウィック氏とほぼ同年令の主役が登場する小説は、『ピクウィック・ペイパーズ』以外にない。それゆえ、われわれに得られる慈悲深い叔父の全貌は、ピクウィック氏であるにちがいない。彼の仲間の多くは彼より若干年下であるにすぎないが、小説家

自身ははるかに若かったので、年長者たちの描写に、青年らしい冷やかしが少しばかりにじみ出ている。その証拠としては、今だに若者みtainな扮装をし、若者みtainな立居振舞をするタップマン氏を見るだけでよい。子供たちは主に家族のパーティにおける端役として登場している。あのデブの少年が目立つとすれば、よく食べよく眠りこけるからではなく、「背すじをぞくぞくさせてやりたい」という早熟なゴシック派の傾向があるからなのだ。これ以後、ディケンズは少年少女——早死さえしなれば若い男女も——が成長し世間の風習を覚えていく姿に焦点を合わせることになる。すでに触れたとおり、このイニシエーションの過程に、親たちはほとんど何の関わりも持たない。良い方にも悪い方にも導いていく助言者は、親以外の人である。古代ギリシャ・ローマの叙事詩では、人間は神によって運命を管理され、天界の事態に応じて、先導されるか迫害されるかのいずれかであった。ディケンズの主人公・女主人公に関しても同じ事が言えるかもしれない。彼等は、自分たちを待伏せして天から不意に押しかけてくる陰謀や加担のわけがほとんど理解できないままに、悪霊に追い回されるかと思うと、機械仕掛けの神（デウス・エクス・マーキナ）に救出される。それらの超自然的勢力は、良い叔父・悪い叔父——各々の原型となる先祖はドン・キホーテとリチャード3世、ディケンズの像型では、ピクウィック氏とクリスマス以前の意地悪スクルージ——という人間の姿をとって現われている。このような緊迫を強く意識する作家グレアム・グリーンは、ディケンズのメロドラマが「永遠に魅惑的なマニ教的弊害」により強められていると、巧みに指摘している〔ディケンズは善と悪の闘争を演じる2次元劇〕。

『ピクウィック・ペーパーズ』にみなぎる圧倒的善意は、以後のディケンズの小説を通して発露している悪意の力と、いっそう互角の形勢を呈している——時には逆に善意が制圧されることもあるほどである。それらの小説の中で、ディケンズは更に深く踏み込み、更に大きく範囲を広げている。ざっと調べてみれば、それらの小説はほぼ年代順に、間断ないプシューコマキア〔霊魂の闘争〕における、1系列の個別的闘いであると判断されよう。善と悪との本質的相異に関する悲劇的懐疑などは全く見られないが、善と悪との精神的闘いの結果は、小説家ディケンズの成熟につれて、次第に確信を薄め、複雑性を増しているのだ。『救貧院生まれの少年の生い立ち』という、パニヤンを模倣した副題のついた『オリヴァー・ツイスト』は、明白な寓意物語（アレゴリー）に最も接近している最も初期の作品である。あたかも擬人化が1目瞭然でないかのように、著者は表現の道徳的リアリズムを弁明した序言の中で、種々な化身の分類表示を行なっている。

最も下劣な悪から最も清純な善の教訓が汲みとれないなど、私はいまだ知らない。……本書を著述した時、社会のくずどもが……軽薄な社交界の華たちと同様、教訓の目的になぜ役立ってはいけぬのか、私には理解できなかった。

こんな真意から、小さなオリヴァーの中に、善があらゆる逆境を通じて生きのび、最後に勝利を得るといふ原則を示したいと思った時、つまり、オリヴァーが最も自然な形でその掌中に陥るたぐいの人々に配慮しつつ、どのような仲間たちの間で彼を最も試練にかけることができるか考えた時、本書に登場する人々を思いついたのだ。（『オリヴァー・ツイスト』序言）

このゆえにディケンズは、ロンドンの暗黒街に範を得た登場人物たち——当時の「残虐なメロドラマ」やニューゲイト派「扇情小説」に登場していた——を通して、悪の原理を擬人化した。

巻頭で彼が攻撃した制度は、新救貧法およびその社会的結果である救貧院制度だった。しかしオリヴァーという子供一般は、引き続き1つの道徳劇の世界へと移って行き、邪悪なユダヤ人フェイギンの巢窟と、上品なブラウンロー氏や彼の情深い友メイリー1家が提供する快適な家庭との間を、操られて行き来する。或る章の表題「追跡と逃走」は、より全体的なパターンにも当てはまる。オリヴァーは恩人たちに救助され、悪人たちに奪還される。憩いの場も安全には思われず、窓辺にフェイギンと悪らつな異母弟モックスが悪夢のように出現する。ビル・サイクスは、誘拐との共犯関係を後悔するナンシーを殺害した後、追いつめられ——繰り返し現われるディケンズ特有の文句——で、天罰を受ける。「陽気な老紳士」フェイギンは、少年たちに犯罪を伝授することにより教師・後援者の任務を曲解したので、当然死刑を宣告され、わめきつつ処刑される。オリヴァーは最終的に救助され、生来の善良さに戻される。つまり、この捨て子は、彼自身の家族も同然の或る1家へ養子に行くのだ。古風なピクウィック的独身者ブラウンロー氏は、オリヴァーの父の、はるか昔に故人となった妹と婚約を交した仲だったので、オリヴァーの叔父も同然である。なおいっそう奇跡的なことに、姉のようなローズ・メイリーはオリヴァーの亡き母の妹に当り、彼の叔母だと判明する。この2人の親なし子〔オリヴァーとローズ〕がしっかりと抱き合う時、「その一瞬のうちに2人は父を得て父を失い、姉を得て姉を失い、母を得て母を失ったのだ。」

『骨董屋』は、『オリヴァー・ツイスト』の放浪の旅人の歩みを、或る程度踏襲している。孤児の女主人公は、これまた世間知らずで、都会のジャングル田舎の森を放浪する。だが、彼女の負担は放蕩な祖父の賭博癖により、いっそう重くなる。2人に店を立ち退かせる小人の家主ダニエル・キルプは、利欲の念を超えた憎悪を抱いて2人を迫害する。義母の言葉で言えば「小男のせむしの悪党で怪物」であるキルプは、サディスト的喜びを感じつつ悪行にふける——不吉な予言を吐き、八つ当りに当りちらし、しかめ面をしてみせ、鬼の金貸しという非難に快感を覚えながら。彼には、追従的弁護士 Sampson・ブラスから、「完ぺきな道化」という賛辞が与えられている。キルプとリチャード3世との類似性は、たとえ彼自身の妻のことばがなかったとしても、彼の本拠がタワー・ヒルにあることによって際立つだろう。演劇面では、彼は傍白や独白をしきりに語り、その中には無韻詩に近いものもある。最初の妻が死ねばすぐにも結婚しようと、リトル・ネルにプロポーズする時の彼は、真にリカードー〔譯者 1772
1823〕派の人物である。彼は、ジャーリー夫人のろう人形のどれよりも怪奇な姿で、ネルの夢の中に出没してネルを悩ませる。彼女を救いに来るのは見知らぬ謎の人、風変わりだが同情心の厚い旅人「独身紳士」で、もつれた糸がほどかれてみれば、結局、彼がネルの大叔父であると判明する。ネルと祖父トレントは、もう1人の叔父タイプ、バチェラー老人からも保護を受ける。しかし、そのような努力は余りにもささやか且つ手遅れである、つまり、追跡の手を緩めず「走馬燈に浮かぶ首のように」不意に現われるキルプの謀略の前では、姿がかすんでしまうのである。マニ教的争いも、今回に限っては光明に対する暗黒の勝利で解決される。このゆえに、ディケンズの作品群において「ネリアッド」は特別な地位を占めている。

1方、『ニコラス・ニクルビー』では、主人公は成人したばかりの時期を出発点とした。そしてスモーレット（頭韻体の題名にまで彼の影響が及んでいる）に倣って、主人公のピカレスク風展開が構想されたのであった。自分の天職を求めて、ニコラスは年季奉公を続けて3度経験する——まずワックフォード・スクエアズのドゥザボイズ・ホールで、次にヴィンセント・クラムルズの旅役者1座で、最後にチアリブル兄弟の会計事務所で。中間の役者世界での出来事は、ヨークシャーの学校に対する痛烈な諷刺と、ブルジョワ的結末の博愛的商業主義との間に設けられた、滑稽な余興である。1卵性双生児のチアリブル兄弟、ネッドとチャールズは、

自分の腕1本で成功した商人で、勿論独身である。2人には実在のモデルがあったというディケンズの保証にもかかわらず、彼等の目ばたき、もみ手、ピクウィック風のゲートル、おうむ返しの会話などのせいで、彼等には迫真性がない。この兄弟の善行——それはプロットの不足分を余りにも安易に埋め合せている——は、邪悪な叔父の化身ラルフ・ニクルビーの悪行と、均衡を保っている。冷酷な高利貸・株式会社発起人としてのラルフは、商業の有害・不正な面の権化ともなっている。「手短に言えば、貧しいニクルビー家の人々は、人づきあいよく幸福であった。他方、金持のニクルビーは、孤独で惨めであった。」彼が自分の甥〔ニコラス〕に対して情容赦ない意趣返しを行い、めいのケートを遊蕩児マルベリー・ホーク卿の悪質ないたずらの餌食にして私利を計る理由は、それで十分であっただろう。ラルフの企みは全て裏をかかれ、ついには、彼がスマイクの父親であること、そしてスマイクが死亡したことが明される。そこで彼は冷笑し悪態をつきながら、自己崩壊の道をたどっていく。スマイクを苦しめる張本人スクィアーズが、「スクィアーズ夫人はあの子の母親、祖母、叔母——ああ！それに叔父も加えてかまわんだろうが、それら全部をひとりで兼ねてきたのだ！」と自慢する時、さまざまな義務が愚弄される転回が、1巡したことになる。

『マーティン・チャズルウィット』もまた、散漫なスモーレット風の形式に従っているが、孤児の主人公が大西洋の向岸まで足を伸ばす巡歴の旅と、彼のアメリカでの不幸な出来事による心痛とは、いかなる指導者の後援よりも、大きく彼の円熟化に役立っている。ペクスニフ氏はひどく熱心げに道を説くが、弟子の作品を盗作する。祖父マーティンは、欲深い相続人たちに自分達の利己主義を痛感させるため、故意に気むづかし屋の守銭奴の役柄を演じる。彼等の疑わしい遺伝質の問題は、擬似英雄詩体の序論の中で持ち出されており、チャズルウィット家の家系に、立派に受け継がれた「暴力沙汰と浮浪性」の伝統があると主張されている。ディケンズの描く不幸な家族の中で最も不快な家族の1つチャズルウィット1族に、〔読者が〕引きあわされるのは、いわば臨終前の看護の最中のことである。そして、頑健な家父長の「遺言書の意図」をめぐる彼等の弄する策謀を見て、この上もなく鋭敏な読者ならば、ベン・ジョンソンやバルザックの模倣ではないかとの疑念を強めることだろう。マーティンの従兄弟ジョーナス・チャズルウィットは、1族の中で最も狡猾な人物であり、ディケンズの邪悪な1群の金融投機師の中で最も精力的な1人である。チャリティ（慈善）とマーシー（慈悲）が、皮肉なこじつけの愛称として、ペクスニフの2人の娘チェリーとメリーに与えられている。姉に求婚し妹と結婚するジョーナスは、われわれに再びリチャード3世——「こんな気分のときに求婚を受けた女がいるか？」〔リチャード3世〕——を思い出させるかもしれない。これには、妻の妹に対するディケンズの偏愛が暗に示されているのだろうか？メリーが酔っ払いの夫によって——おやおや！——たたきのめされ、打ちやぶられ、「夢やぶられ苦境に立たされる」ことを考えると、この暗示はほとんど裏付けのとれないものとなろう。ジョーナスは、会社設立から破産へと、いっきに悪化の道をたどる。彼は、父を自殺に追いやることにより事実上親殺しをした後、仲間の詐欺師モンタギュー・ティッグを殺害する。そしてあの気も狂わんばかりの逃走の後、クイルプや他の怪物と同様、自己崩壊する。

『ドンビー父子』においては、商業は詐欺的事業でなく、家庭を蝕ばむものとなっている。哀れなポールは、金持の子であるのと同程度に浮浪児でもある。何故なら富を誇る父親にとつて、父親の務めとは会社の存続を計ることに他ならないからだ。フローレンスは偶然出会った1人の子供にたずねられている、「フローレンスさんも、あたしと同じ孤児なの？」と。彼女は父親がいるのに孤児となっている。なぜならば、父親の価値体系の中では彼女はいかなる地位も占めていないからだ。そしてまた、彼女の威勢のいい継母イーデイスも占めるべき地位を

得ていない。イーディスは——フローレンスと同様だが、1つ相異点として自分の評判を傷つける恐れがあるのに——やむなく逃げ出すことになるだろう。学校は例の如く、練習問題を課して家恋しさの気持ちをつのらせる。他方、ポールの死という実例により、金で買えないような価値基準の存在が再び確認される。ポールは余りにも「古風」で時代に合わなかったのだ。だがその点ではドンビー氏も同様である。氏の海上運送事業は、新興の鉄道により危機にさらされており、貨物船「サン・アンド・エア号」の沈没によってやがて破綻するからだ。この状況は、思春期のウォルター・ゲイと彼を溺愛する叔父ソル・ジルズ（「古風な店の古風な男」）により補足される。フロイト流の言い間違いとも皮肉な洞察とも考えられるのだが、ドンビー氏は氏の会社に勤めているウォルターの姿に気付き言う——「『おや！君は船舶用具商ジルズ君の息子だね』『甥でございます』と私は言った。『君、わしは甥と言ったんじゃないよ』とドンビー氏。」叔父が、おそらく海のもくずとなった甥の捜索に出かける時、海の香漂う親友カトル船長が船舶用品店を引きつぎ、フローレンスの育ての叔父となる。全員がその店で再会し和解が成る。そしてそこで、ドンビー氏は孫息子を猫可愛がりすることになるだろう。ディケンズの手にかかると、性格は実に確固として変化しないのがそれまでの通例だったので、このドンビー氏の態度の軟化に関して、ディケンズは前置きの中で弁護しておく必要を感じた程だった。

(未了)